

《動向・紹介》

ナショナル・アイデンティティの歴史と方法論的ナショナリズム ——新たな方法論の構築に向けた一考察——

中辻 柚珠

近年のナショナリズム再燃という世界的情勢を背景に、「ナショナリズムはなぜ／どのよう
に起こるのか」という大きな問いが再び重要性を得てきている。ナショナリズム研究の膨
大な蓄積にもかかわらずなお問いが生じるのは、ナショナリズムが現在アクチュアルな
問題であるからだけでなく、従来の研究手法に課題が残されているからでもあるだろう。と
りわけ、極右政党の台頭が当初多くの人びとにとって想定外であったことは、ある問題を示
唆している。ナショナリズムは、少なからぬ人びとの抵抗感にもかかわらず、過熱する。歴
史においてはどうだったのであろうか。

本稿では、近年のナショナリズム史研究の成果について、主としてアイデンティティの問
題を方法論的ナショナリズム批判の議論に絡めながら整理し、今後の研究に向けたいくつ
かの課題を提示する。

ナショナル・アイデンティティの研究に今日まで重要な影響を与え続けているのが、
Benedict Anderson の『想像の共同体』である¹。本書において Anderson は、ネイションを出
版資本主義に支えられた「想像の共同体」であるとした。本研究がネイションの構築主義史
観を支える重要な礎となったことはよく知られている通りである。

Anderson は同書において、想像上のものでしかないネイションのためになぜ人は死ぬの
かという問いかけも行っている。この問いに対する彼の回答は、「ゲマインシャフトの美」
に由来する愛着心であるとされる。しかし、その美は誰しものが共有しうるような普遍的なも
のなのであろうか。また、ナショナル・アイデンティティとは、常にネイションへの愛着心
を伴うものなのであろうか。

ここで、従来の研究が暗黙裡に前提化してきた問題に言及する必要がある。それは、ネイ
ションは（想像上のものにせよ）構築された、すなわち、ネイションの均質的一元化は既に
達成されたという前提である。ここに、ネイションの形成を自然なこととして捉える方法論
的ナショナリズムが潜んでいる。方法論的ナショナリズムは、ネイションを所与のものとし
て見なし、分析対象である社会をネイション・ステイトと同一視する傾向を指す²。こうした無

¹ ベネディクト・アンダーソン（白石さや・白石隆訳）『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と
流行』書籍工房早山、2007年（原著：Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and
Spread of Nationalism*, London, 1983）。

² 方法論的ナショナリズムの理解については、主として以下を参考にした。Andreas Wimmer and Nina G.
Schiller, “Methodological Nationalism, the Social Sciences, and the Study of Migration: An Essay in Historical
Epistemology”, *International Migration Review*, 37-3, 2003, pp.576-610; Daniel Chernilo, *A Social Theory of the
Nation State: The Political Forms of Modernity beyond Methodological Nationalism*, London and New York, 2007;

意識の前提によって、ネイションの枠組みは強化される。

この問題を克服するにあたり、社会学者 Rogers Brubaker の議論は大いに参考となる。Brubaker は 2002 年の論稿「集団なきエスニシティ」において、ネイション・エスニシティ・人種を実体ある集団かのように描く傾向を「集団主義 groupism」と見なし、実在するものとしての集団 group ではなく、文脈により出来事として生じる変数としての集団性 groupness を、ナショナリズム研究における基本的な分析カテゴリーとする必要性を説いた³。

Brubaker の指摘は、方法論的ナショナリズムに警鐘を鳴らすのみならず、それを乗り越えるための重要な視角をわれわれに提供する。すなわち、集団性を分析概念に据えることで、出来事としてのネイションを偶発的なこととして、またナショナリズムを波のあるものとして理解することが可能となる。このことは、Brubaker 自身も述べる通り、集団性が結晶化に失敗する可能性も示唆する。同時に、ネイション形成をネイション・ステイトの設立への単線的で発展的なプロセスとする見方は見直しを迫られることとなる。

ナショナリズムが強弱を有した集団性の状況に応じた発露であるならば、ナショナル・アイデンティティはその形成をゴールとしない、程度や内容の問題として多角的に捉えられるだろう。こうして、アイデンティティの複数性や曖昧さ、切り替え、そして無関心といった観点が登場してくることとなる⁴。

しかし、アイデンティティの曖昧さの指摘のみでは、従来のナショナリズム史像を相対化することはできても、ナショナリズムの展開に関する再考察には至れない。この点について深く検討し、アイデンティティの曖昧さを分析する意義と方法を提示したのが歴史家 Tara Zahra である。Zahra は 2010 年の論稿“Imagined Noncommunities”において、「ナショナル・インディファレンス（ナショナルなものへの無関心）」を「それを見ているナショナリストの目の中でのみそれとして存在」し、「それを消そうとするナショナリスト自身の粘り強い努力によって、生命を与えられ、制度化される」ような「想像の非共同体」であるとした⁵。この無関心を消すためにナショナリストの政策は形作られ、急進化した。本稿に先立つ 2008 年の彼女の実証研究によれば、前世紀転換期以降のチェコ諸邦の言語的境界地域において、チェコ系・ドイツ系双方のナショナリストらは、ナショナル・アイデンティティの曖昧な人びとを自身のネイションに引き入れるために、時に福利厚生の実現を図り、時に無関心を公的な場で非難するといった急進的態度に出ることで、ネイションへの帰属意識を人びとに

佐藤成基「国家／社会／ネーション——方法論的ナショナリズムを超えて」佐藤成基（編）『ナショナリズムとトランスナショナリズム——変容する公共圏』法政大学出版局、2009 年、13-31 頁；Daniel Chernilo, “The Critique of Methodological Nationalism: Theory and History”, *Thesis Eleven*, 106-1, 2011, pp. 98-117.

³ R. Brubaker, “Ethnicity without Groups”, *European Journal of Sociology*, 43-2, 2002, pp. 163-189.

⁴ この観点到即した歴史研究の例として以下が挙げられる。Jeremy King, *Budweisers into Czechs and Germans: A Local History of Bohemian Politics, 1848-1948*, Princeton, 2002; Pieter M. Judson, *Guardians of the Nation: Activists on the Language Frontiers of Imperial Austria*, Cambridge, 2006; James Bjork, *Neither German nor Pole: Catholicism and National Indifference in a Central European Borderland*, Ann Arbor, 2008; Tara Zahra, *Kidnapped Souls: National Indifference and the Battle for Children in the Bohemian Lands, 1900-1948*, Ithaca, 2008; Maarten V. Ginderachter and Jon Fox (eds.), *National Indifference and the History of Nationalism in Modern Europe*, London and New York, 2019.

⁵ Tara Zahra, “Imagined Noncommunities: National Indifference as a Category of Analysis”, *Slavic Review*, 60-1, 2010, p.105.

植え付けようとした⁶。ナショナル・アイデンティティの曖昧さはナショナリズムを引き起こし、方向づける要因となりえたのである。

また、このような Zahra の指摘から、ネイションへの帰属意識を忠誠心や愛着心のみに帰することの限界が浮かび上がる。ネイションへの帰属意識は、物理的な損得感情や、脅迫・詰問による恐怖心や恥の感情にも左右されうる。したがって、ナショナル・アイデンティティは単なる有無ではなく、その内部に多様な意味を内包するものとして考察されるべきだろう。この点で、Brendan Karch が提示した概念も示唆に富む。彼は、ネイションへの絶対的価値の信奉と、ネイションを異なる利害のための道具とする態度を区別し、後者を道具主義的ナショナリズム *instrumental nationalism* として概念化した⁷。ネイションへの帰属意識の多様なあり方を分析することは、ネイションを無意識に均質的集団として想定する方法論的ナショナリズムを乗り越えるための重要な取り組みである。

Zahra の研究ではいわゆる「普通の人びと」とナショナリストの間の緊張関係に焦点が当てられたが、ネイションの規範性を問いに付し、ネイションへの人びとの多様な関わり方を広く視野に入れるのであれば、研究対象は「普通の人びと」以外にも開かれるべきであろう。実際、芸術家や企業、聖職者に焦点を当てながら、多様な主体の抱える利害とナショナリストの政策の間のずれや摩擦を分析する研究が生じてきている⁸。これらの考察対象は文字史料を残すため、歴史家にとっては取り組みやすくもあるだろう。

最後に、方法論的ナショナリズム批判自体のこれまでにについても少し批判的に検討してみたい。「方法論的ナショナリズム」という言葉は既に 2000 年頃からナショナリズム研究者らの間で広く知られてきており、その歴史は浅くない。しかし、社会学者 Daniel Chernilo の 2011 年の指摘にもあるように、本問題には、研究者の誰もが問題として認識しているにも関わらず、研究上の至るところに蔓延しているという重大なパラドックスがある⁹。その原因は、問題の指摘の多さに比して、打開策となるような具体的方法論がいまだ乏しいことにあるだろう。

具体的方法論の提示を強調しておきながら、本稿においても何かを提示できるわけではない。ただ、上記の問いをもって Zahra の 2010 年の論稿に戻ることで浮かび上がってくる一つの突破口を指摘したい。Zahra は「ナショナル・インディファレンス」という独自の分析概念を設ける理由について述べた個所で、「非ナショナルな、あるいはナショナルなものに曖昧な人びとを描写する適切な用語の不在は、ナショナリストの前提がいかに社会科学者らの語彙を形作ってきたかを鋭く反映している」と指摘している¹⁰。すなわち、われわれ

⁶ Zahra (2008), *op. cit.*

⁷ Brendan Karch, “Instrumental Nationalism in Upper Silesia”, Ginderachter and Fox (eds.), *op. cit.*, pp. 180-203.

⁸ Tom Verschaffel, “Too Much on Their Minds: Impediments and Limitations of the National Cultural Project in Nineteenth-Century Belgium”, Ginderachter and Fox (eds.), *op. cit.*, pp. 15-34; Zachary Doleshal, “National Indifference and the Transnational Corporation: The Paradigm of the Bat’a Company”, Ginderachter and Fox (eds.), *op. cit.*, pp. 81-105; Jim Bjork, “‘I Have Removed the Boundaries of Nations’: Nation Switching and the Roman Catholic Church during and after the Second World War”, Ginderachter and Fox (eds.), *op. cit.*, pp. 204-224.

⁹ Daniel Chernilo (2011), *op. cit.*

¹⁰ Zahra (2010), *op. cit.*, p. 98. なお、先述の通り、ナショナル・インディファレンスは根本的にはナショナ

の社会について語る語彙は既にナショナリストのパラダイムに絡めとられているのである。研究者自身が便宜上の使用であることを認識していたとしても、ナショナリストと同じ語彙で語るかぎり、ネイションの枠組みは再生産され続ける。研究者がこの枠組みの強化に加担する必要はなく、分析に有効な独自の語彙を導入することには正当な意味がある。

問題提起は今も続いている。歴史家 Stefan Berger と Eric Storm は、自身が編集を務めたナショナリズム史研究の理論書 *Writing the History of Nationalism* (2019)の序章を、方法論的ナショナリズムに警鐘を鳴らす形で締めくくっている。そこには、歴史学を取り巻く方法論的ナショナリズムの実例が列挙されている¹¹。まず、歴史叙述上のナショナリズム *historiographical nationalism* がある。これは、歴史家がネイションを自明の単位として歴史を描くことを指す。なお、Berger はナショナル・ヒストリーの叙述自体を分析対象としたナショナリズム史研究を行ってもある¹²。続いて、制度上のナショナリズム *institutional nationalism* がある。これは、文書館、図書館、統計調査、研究費助成などの公的制度がネイションの枠組みに依存していることに由来する。研究者自身がこの問題に働きかけることは現実的には困難かもしれないが、自明視してよいことにはならない。用語上のナショナリズム *terminological nationalism* は、より歴史家にとって根深い問題である。これは、特定のネイションの文脈にしか適用できない用語の利用を指す。例として「ヴィクトリア時代」や「リゾルジメント」、「明治維新」などが上げられている。これにより、ネイションの枠組みを越えた比較研究が困難になっている。最後に上げられるのは、規範的ナショナリズム *normative nationalism* である。帝国を「支配」や「抑圧」といった言葉で表現し、ネイション・ステイトの建国を「革命」や「解放」として表現する傾向は、ネイション・ステイトに規範性を付与する。また、「ハイブリッド・アイデンティティ」のような新たな概念ですら、均質的ネイション・ステイトを基準とするところから生じている。以上の諸課題に上手く対処するために、「研究手法の改善、語彙の見直し、過去の物語をごく慎重に描き直すこと」の必要性が指摘される。

ここに上げた問題のすべてを一挙に排除することは困難であるし、おそらくそのような急進的なやり方では何も語れなくなるだろう。Chernilo の指摘にもあるように、単にネイションの枠組みに触れないだけでは、ネイションの均質性の前提化に問いを付すことにはな

リストの目の中にのみ存在する「想像の非共同体」である。この定義によって、史料ベースの具体的方法論が歴史家に提示されている。同時に、彼女はナショナル・インディファレンスの用語が実際の人びと・現象・振舞いに適用可能なものと述べる。しかしこれは、Brubaker の議論に依拠し、ナショナリストの認識と研究者の分析視角を混同させてはならないと述べる彼女の考えに照らせば、ナショナリストが無関心だと想像したものに人びと・現象・振舞いが含まれるという意味で捉えるべきだろう。筆者自身は、ナショナリストの実践のカテゴリーと、その実践が向けられうる現実の人びとや態度を指す用語は区別されるべきだと考えており、後者は「ナショナル・ディスタンス」とするのが妥当ではないかという見解を、早稲田大学ナショナリズム・エスニシティ研究所主催のシンポジウム「ナショナル・インディファレンス (national indifference) 論を再考する」(2020 年 7 月 18 日)にて述べた。

¹¹ Stefan Berger and Eric Storm, “Introduction: *Writing the History of Nationalism* – in What Way, for Whom and by Which Means?”, Stefan Berger and Eric Storm (eds.), *Writing the History of Nationalism*, London, 2019, pp. 1-18.

¹² Stefan Berger, “A Return to the National Paradigm? National History Writing in Germany, Italy, France and Britain from 1945 to the Present”, *The Journal of Modern History*, 77-3, 2005, pp. 629-678.

らない¹³。既存の枠組みに潜むナショナリストの規範を慎重に解体し、徐々に語彙を刷新していくことが重要である。その際、ネ이션化の未達成の部分的理想化する傾向に陥らないよう注意する必要もあるだろう。研究者に求められるのは、ナショナリストのパラダイムに絡めとられた歴史学を脱ネーション化することであって、反ナショナリズムの政治的イデオロギーを新たに付与することではないはずである。

以上を踏まえて、今後のナショナル・アイデンティティ研究に向けた歴史学上の課題について整理すると、次のようになる。第一に、ナショナル・アイデンティティに関する研究は、その有無の実証を目的化するのではなく、ネーションに付随する多様な感情のあり方や実利的観点等を視野に入れ、多角的に検討されるべきである。第二に、第一の観点から明らかにされる人びとの多様な認識を、ナショナリズムの展開との関係性の中で考察していく必要がある。第三に、歴史のあらゆる側面をネーションの枠組みに還元しないための語彙の見直しが必要である。ナショナリズム史の脱ネーション化とナショナリズム研究全体の今後の発展は、この方法論的ナショナリズムの克服にかかっている。

[付記] 本稿は、令和2年度RA経費による研究の成果の一部である。

(京都大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員DC)

¹³ Chernilo (2007), *op. cit.*